

漢語近世音と契丹文字漢字音(8)

—契丹小字の入声表記、易・積の韻尾、借用語の層—

吉池孝一 中村雅之

中村：前は吳英喆(2007)¹によって、度使(節度使)の度に、旧音を保存した契丹漢字音として韻尾kのあることを確認しました。今回は吳英喆(2011)²を検討しましょう。

易の韻尾

吉池：吳英喆(2011)は、耶律奴墓誌第34行の經典『易』の易(中古音jiek)が𠂔𠂔(ik)もしくは𠂔𠂔(ik)と表記されることより、易に入声韻尾kを認めます³。

契丹小字《耶律奴墓誌》第34行有𠂔𠂔𠂔 𠂔𠂔，這表示“於《易》曰”，已由卽實先生釋出。其前一字表示“易”且附有時位格詞尾，因此𠂔𠂔對應於漢字“易”。𠂔𠂔可讀ik，恰好吻合，𠂔𠂔之中古音jiek④，有別於其近代音i④。契丹小字中“易”有時還記作𠂔𠂔𠂔(《副部署》35)，該字亦可讀作ik，因為𠂔和𠂔的發音基本相同。該二例說明了借入契丹語的“易”依然帶有入聲韻尾-k。(88頁)

中村：𠂔と漢語中古音の対応のみによって𠂔が破裂音k(又はgと表記することも可)を含むことはできません。吳氏にとって、𠂔が破裂音k(又はg)を含むことは自明のことなのでしょうが、手順として他の資料によりそのことを知りたいものです。

吉池：早くは卽實(1996)が𠂔の音をku:(又はgu:)とするが確実な議論とは思えないので⁴、愛新覺羅 烏拉熙春(2004)⁵を挙げることにします。烏拉熙春(2004)は、契丹語の金を契丹

¹ 吳英喆(2007)「契丹文中之漢語入声韻尾的痕跡」『漢字文化』2007(3)、26-29,64頁。

² 吳英喆(2011)「再論契丹文中之漢語入声韻尾的痕跡」『北方文化研究』2(1)、85-90頁。

³ 第3回の対談で検討した愛新覺羅 烏拉熙春(2004)「遼代漢語無入聲考」(『立命館言語文化研究』16(1)、121-141頁)は同一箇所を「𠂔𠂔-𠂔𠂔𠂔/易經(與位格)」(131頁)とし、𠂔𠂔𠂔の前にある𠂔𠂔を易と読み入声韻尾は無いとするがこれは誤読であろう。劉鳳翥(2014)(『契丹文字研究類編』北京：中華書局)は𠂔𠂔には傍訳を付さず、「𠂔𠂔𠂔《易》於」(838頁)とする。𠂔𠂔は読めないとの立場である。

⁴ 卽實(1996)『謎林問徑—契丹小字解讀新程』瀋陽：遼寧民族出版社。前後関係から通常月令(銘)𠂔𠂔(曰)と読まれるところ、月令(韻)𠂔𠂔(歌)とする。𠂔𠂔をtaku:と読みモンゴル文語の歌dayuuに当てる。(6頁)

⁵ 愛新覺羅 烏拉熙春(2004)『契丹語言文字研究』京都：東亞歴史文化研究會。早くは愛新覺羅 烏拉熙春(2002)「契丹小字の語音構擬」『立命館文学』第577号、2002年12月があるとのこと。現在確認中である。

小字で**公𐰺𐰽**、漢字訳語で女古とすることより、**公𐰺𐰽**を n.i.ogo>njogo とし、これより**𐰽**の音を ogo とします。なお下記引用文の「不存在韻母變讀爲的 i 可能。」は「不存在韻母變讀爲 i 的可能。」の誤植でしょう。「又寫作音字」のように「又」とするのは、契丹語の金を契丹文字で表記する方法には二種あり、表意文字 **𐰽** のほかに、表音文字で表記した **公𐰺𐰽** があることを「又」と表現としたのでしょう。

“金”在契丹小字墓誌中又寫作音字拼合型：**公𐰺𐰽**，以“女古”之音擬之，則是**公𐰺𐰽***n-i-ogo>njogo（“女”字屬遇攝開口三等，不存在韻母變讀爲的 i 可能。因此其主要元音必是由**𐰽**字來表示的）是可知**𐰽**的音值爲 ogo。（47 頁）

中村：『契丹小字研究』（1985）は借用漢語との対応により **公** を n、**𐰺** を i とするので、残る部分は **𐰽** です。**𐰽** は、女古の古（近世音 ku）⁶ の部分に相当するとみて破裂音 g を含むとするわけですね。『遼史・国語解』に「女古 金也。」とあるので金の漢字訳語が女古であるのはいいとして、「墓誌中」とあるのはどの墓誌を指すのでしょう。

吉池：劉浦江・康鵬(2014)⁷ の語彙索引に拠ると、**公𐰺𐰽** は多数の墓誌にでてくるのですが、烏拉熙春(2004)の 94 頁に、**公𐰺𐰽** は金代博州防禦使墓誌の第 12 行で金国の金の表記に使用されるとあるので⁸、まずはこの墓誌を挙げてよいのでしょう。金代博州防禦使墓誌第 12 行の **公𐰺𐰽** を含む前後を、劉鳳翥(2014)⁹ の模写（フォントに翻字する）と傍訳によって示すと次のとおりです。

金代博州防禦使墓誌

第 12 行：・・・-**𐰽冬余𐰽** **公𐰺𐰽-𐰺𐰽𐰽-𐰽𐰽𐰽𐰽𐰽𐰽**・・・

金 國於

【金国において】

中村：**𐰺𐰽** は国で、**𐰽** は場所を表わす格助詞ですね。**𐰽冬余𐰽** と **公𐰺𐰽** の間に空白があるのは、**公𐰺𐰽-𐰺𐰽**（金國）を尊んだ書式とみて良いのでしょうか。

⁶ 楊耐思(1981)『中原音韻音系』北京：中國社會科學出版社。

⁷ 劉浦江・康鵬(2014)『契丹小字詞彙索引』北京：中華書局。

⁸ 「契丹語的“金”還寫作：**公𐰺𐰽**（見於《金代博州防禦使墓誌銘》第 12 行。“金國”之“金”），其音當即“女古”之音：njogo，則可知小字“**𐰽**”所表之音爲 jogo（漢字“**𐰽**”之中古音作*ziak，契丹小字之 jogo 當係由此而來。」（94 頁）。なお、47 頁及び 68 頁では **𐰽** を ogo とし、94 頁では jogo とする。烏拉熙春(2004)は諸論文をまとめたものなので、議論の展開を反映しているのかもしれない。

⁹ 劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』北京：中華書局の第四冊。

吉池：金代の墓誌で、空白を設けて尊ぶ国名であるからには金朝の金であるに違いないという指摘は、早くは劉鳳翥・周洪山・趙傑・朱志民(1995)にあります¹⁰。これにより劉鳳翥・周洪山・趙傑・朱志民(1995)は**公𠂔𠂔**を女真としたのですが¹¹、その後劉氏は劉鳳翥(2014)の模写にあるように、烏拉熙春(2004)等の**公𠂔𠂔**を金とする読みに拠り、女真を金に訂正したという経緯です。

中村：**𠂔**の母音についてはさらに議論が必要なのでしょうが、破裂音 **g** を含んでいたことは認めていいのでしょうか。

吉池：**𠂔**の音について、劉鳳翥・青格勒(2003)¹²は、契丹小字墓誌の撰者としてしばしば登場する耶律固について、その役職「雲騎尉」を宗魏國妃蕭氏墓誌では**亦-𠂔𠂔-𠂔**と表記し、義和仁壽皇太叔祖耶律弘本哀册では**亦-𠂔𠂔-𠂔**と表記することより、**𠂔**と**𠂔** **k** (又は **g**) は同音であるとします。そうすると**𠂔**が破裂音 **g** を含んでいたことは確実であり、経典の『易』**𠂔𠂔**は旧音を保持した契丹漢字音として入声韻尾 **k** に相当する音を持っていたとして良いのでしょうか。

中村：**𠂔**が破裂音 **g** を含んでいたとすると、これによって韻母を表記されている入声字は韻尾 **g** を持っていたということになりますね。

韻母を𠂔で表記する諸字

吉池：呉英喆(2011)は易のほかに次の例をあげます。

- ①耶律副部署墓誌 第16行：**𠂔𠂔-𠂔𠂔用-𠂔𠂔𠂔𠂔積慶宮之の𠂔𠂔積**を **sik** とする。
- ②韓高十墓誌第15行：**𠂔𠂔-𠂔用-𠂔𠂔-𠂔𠂔𠂔-𠂔積慶副宮使の𠂔𠂔**【**𠂔**は **i** 対談者注記】積をあげ入声韻尾のないものがあり、入声韻尾の存在は普遍的なものではないとする。
- ③耶律副部署墓誌第45行：**𠂔𠂔-𠂔𠂔盜跖の𠂔𠂔跖**により **-k** 韻尾を認める。

¹⁰ 劉鳳翥・周洪山・趙傑・朱志民(1995)「契丹小字解讀五探」『漢學研究』13(2)、313-347頁。「**公𠂔𠂔**在**𠂔𠂔**之上，上面又有空格，其爲國名基本上可以確定。在金代用空格以表示尊敬的國名只能是本朝的「金。」(319頁)。

¹¹ 「那麼**公𠂔𠂔**究竟爲何意呢？這只能從讀音方面來進行探索。**公𠂔𠂔**是一個單詞，它由**公**、**𠂔**、**𠂔**三個原字組成。已知**公**音 [n]，**𠂔**音 [i]，二者相拼而爲 [ni]，近似於漢字「女」的讀音，**𠂔**的音值以前沒有正確構擬過，倘若把它構擬成「真」的音，則**公𠂔𠂔**爲「女真」。這如同把「遼」稱爲「契丹」一樣，把「金」稱爲「女真」可能是契丹語中的通例。」(319頁)。

¹² 劉鳳翥・青格勒(2003)「契丹小字《宋魏國妃墓誌銘》和《耶律弘用墓誌銘》考釋」『文史』2003(4)。劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』北京：中華書局的第一冊、257-267頁所收。宋魏國妃墓誌銘第2行の耶律固の役職について「「雲騎尉」是勳。「漆水縣開國子」是爵。音譯「雲騎尉」的「騎」字的契丹小字在契丹小字《皇太叔祖哀册》作**𠂔𠂔**，而此處作**𠂔𠂔**。說明契丹小字的原字**𠂔**等同於原字**𠂔**。它們均應擬音爲 [k]。」(258頁)。

④耶律奴墓誌第 46 行：𐰽𐰺-𐰺𐰽劉焯（隋の文人）の𐰺𐰽焯により-k 韻尾を認める。

中村：①から④の読みはどのような経緯でなされたのでしょうか。

吉池：①を積慶宮之と読み𐰽𐰽積を sik としたのは、吳英喆(2011)によると、蓋之庸・齊曉光・劉鳳翥(2009)¹³です。蓋之庸・齊曉光・劉鳳翥(2009)は、𐰽𐰽（積）-𐰺𐰽用（慶）-𐰺𐰽𐰽𐰽（宮之）-𐰽𐰽（副）-𐰽𐰽𐰽（宮）-𐰽（使）を積慶宮之副宮使と読み、墓主耶律副部署の経歴に挙げる官職の一つとしました。積慶宮は『遼史』卷 31「宮衛」によると遼の世宗が置いた役所名¹⁴です。②は劉鳳翥・青格勒(2005)¹⁵の読みです。

中村：①𐰽𐰽-𐰺𐰽用-𐰺𐰽𐰽は積慶宮の積慶に認められる旧音を保持した契丹漢字音で、②𐰽𐰽-𐰺𐰽用-𐰽𐰽𐰽はほぼ同時代の漢兒言語音がたまたま顔を出したのでしょうか。

③耶律副部署墓誌の𐰽𐰽-𐰽𐰽盜跖の𐰽𐰽跖と④耶律奴墓誌の𐰽𐰽-𐰽𐰽劉焯の𐰽𐰽焯の読みの経緯はどのようなものでしょう。

吉池：③𐰽𐰽-𐰽𐰽盜跖（盜賊の名）の𐰽𐰽跖、④𐰽𐰽-𐰽𐰽劉焯（隋の文人の名）の𐰽𐰽焯とする読みは、即實氏の「契丹小字墓誌中之漢籍典故」（未刊 2010 年 7 月）によるとのことです。この論文は未見です。今回は同一内容を掲載すると思われる即實(2012)¹⁶に拠ることにします。

なお、③𐰽𐰽-𐰽𐰽盜跖（盜賊の跖→盜跖。『莊子』にある伝説上の盜賊名。）は耶律副部署墓誌の後半にあり、𐰽𐰽𐰽𐰽-𐰽𐰽（誌曰）から始まる定型句（1 句 4 語で 38 句からなる）の一部となっています。④𐰽𐰽-𐰽𐰽劉焯（『隋書』に伝がある文人。）も耶律奴墓誌の後半にあり、𐰽𐰽用-𐰽𐰽（銘曰）から始まる定型句（1 句 4 語で 40 句からなる）の一部です。漢文墓誌にも同様の定型句（1 句 4 字が多い）があり美辞麗句により墓主の生涯を記述します。

中村：伝説の盜賊がどうして遼の墓誌銘に現われるのでしょうか。

吉池：即實(2012)は次のような読みを提示します。

第 45 行：𐰽𐰽𐰽-𐰽𐰽-𐰽𐰽兩-𐰽𐰽坐𐰽， 𐰽𐰽-𐰽𐰽-𐰽𐰽-𐰽𐰽

子 興 我 之 獨 ， 盜 跖 道 顯

【讒言によって免職となった子興（“我之”は後置詞）のような人物は独りだけか（独りだけではない）、盜跖が言う道

¹³ 蓋之庸・齊曉光・劉鳳翥(2009)「契丹小字《耶律副部署墓誌銘》考釋」『内蒙古文物考古』2008(1)。劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編』205-216 頁所収。

¹⁴ 「耶魯盤幹魯朶，世宗置。興盛曰「耶魯盤」。是爲積慶宮。」（遼史 364 頁）。

¹⁵ 劉鳳翥・青格勒(2005)「遼代《韓德昌墓誌銘》和《耶律（韓）高十墓誌銘》考釋」『國學研究』15。劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編』114-123 頁所収。

¹⁶ 即實(2012)『謎田耕耘：契丹小字解讀續』瀋陽：遼寧民族出版社。

“古老的漢語借詞”と“新漢語借詞”

中村：ところで、呉英喆(2011)には興味深い議論があります。入声韻尾を伴うものを“古老的漢語借詞”とし、入声韻尾の無いものを“新漢語借詞”とします。

吉池：それは沈鐘偉氏の言葉を紹介した部分ですね。

正如沈鐘偉先生閱讀拙文後所指出的那樣，契丹字文獻中存在的入聲韻尾的痕跡或許證明借入契丹語的古老的漢語借詞帶有入聲韻尾，而後來借入契丹語的新漢語借詞不一定帶有入聲韻尾。筆者贊同沈先生的這種看法。（86頁）

中村：“新漢語借詞”には、必ずしも入声韻尾が有ったわけではない（新漢語借詞不一定帶有入聲韻尾）とする慎重な言い方から推察すると、“新漢語借詞”にも入声韻尾を認める場合もあるということかもしれません。いずれにしても、沈鐘偉氏が、入声韻尾を伴うものを“古老的漢語借詞”とするところは、われわれが“契丹漢字音”として旧音を保存する層を想定したこととほぼ同様です。

借用語の層

吉池：考え方は似ていますが、新旧の層の具体的なあり方についての考えは我々とは異なるようです。まずは、我々のこれまでの対談の内容をまとめてみましょう。なお、契丹語の破裂音・破擦音の表記法としては、**b,d,g,dʒ** と **p,t,k,tʃ** とするか、**p,t,k,tʃ** と **pʰ,tʰ,kʰ,tʃʰ** とするかのも何れかですが²²、ここでは前者の **b,d,g** で表記することにします。漢語音と契丹語音との混同を避けるための便宜的な措置です²³。

	旧漢語 k 韻尾	旧漢語 t 韻尾	旧漢語 p 韻尾
借用語 A 層	無	無	b ¹⁾
借用語 B 層	g ²⁾	r ³⁾	
借用語 C 層		l ⁴⁾	

1) 漢人名の業の大字𐰽𐰺𐰭 (ŋ-b)。漢数字の十の大字𐰽、小字 𐰽𐰺 𐰽𐰺 (fib)。臘月の臘

²² 契丹語の破裂音と破擦音がどのような音によって対立していたかという点について、三つの立場がある。[t] を例とすると、

① 強音と弱音の対立とする立場。強音は発音器官の緊張。音声としては主に [tʰ] など。

弱音は発音器官の弛緩。音声としては [t~ɖ~d] など。

② 清濁の対立とする立場。清音（無声音）[t] と濁音（有声音）[d]。

③ 気音の有無による対立とする立場。無声有気 [tʰ] と無声無気 [t]。無気音は、気音さえ無ければ良いので、前後の環境により [t]（無声）～ [ɖ]（半有聲）～ [d]（有聲）という揺れ幅がある。

²³ これまでは立場によって **d** と **t** の何れも可であることを **d**（又は **t**）のように注記して示したが、ここでは（又は **t**）のような注記は付さない。もっとも対談者の立場は③である。ここでは便宜的に **b,d,g** で表記する。

の小字𐰺𐰽𐰸 (lab)。

2) 崇祿大夫の祿𐰺𐰽 (lug)。僕射の僕𐰺𐰽 (bug)。博州の博𐰺𐰽 (bog)。度使の度𐰺𐰽 (d-g)。易經の易𐰺𐰽 (ig)。積慶宮の積𐰺𐰽 (sig)。

3) 樞密の密𐰺𐰽 (mir/ mēr)、

4) 筆𐰺𐰽 (bil)

中村：旧漢語 p 韻尾の例はもともと数が少ないので議論しにくいのですが、A 層の旧漢語 p 韻尾で韻尾が無い例は今のところ見つかりません。また、数字の十などの一般的な語に韻尾が認められます。この二点より A 層で利用された音とみていいのでしょうか。もっとも十については、契丹人名の十神奴の十に韻尾の無い表記が使用されます。しかしこれを世神奴とする読みもあるので確定するまでは利用できません。

A 層で旧漢語 k 韻尾と旧漢語 t 韻尾に相当する韻尾がなく、旧漢語 p 韻尾に相当する韻尾があるとなると、これは北宋漢人の洛陽音を反映していると想定される『皇極經世聲音唱和圖』（作製年代は 1011-1077 年）の入声韻尾の状況（-k と -t は消失しており、-p のみ認められる）と同じです。

吉池：A 層は沈鐘偉氏の“新漢語借詞”に相当するわけですが、問題は具体的には何を反映したものかということです。可能性としては二つあります。一つは、北宋の漢字音を規範的な音として取り入れたものである。いま一つは、燕雲地域一帯に住んでいた漢人や漢化した契丹・女真・蒙古の人々が使用した所謂“漢兒言語”の音を反映したものである。その何れかでしょう。

中村：当時の“漢兒言語”の音と北宋の漢字音とは異なっていたが、契丹文字による漢字音としては北宋の漢字音が規範的な音として用いられたという可能性も否定できないということですね。しかし、その可能性を証するものが出てこない限り、少なくとも入声韻尾については、“漢兒言語”の音は『皇極經世聲音唱和圖』に反映する北宋の漢字音と同じであったと見てよいのでしょうか。B 層はどうでしょうか。

吉池：B 層の旧漢語 k 韻尾にある崇祿大夫の祿、僕射の僕、博州の博、度使の度、易經の易、積慶宮の積などの韻尾 g は、特定の語彙に旧音が保存された“契丹漢字音”でしょう。旧漢語 t 韻尾に相当する r 韻尾も特定の語彙に見られる“契丹漢字音”と見てよいのでしょうか。いずれも沈鐘偉氏の“古老的漢語借詞”に相当するものです。B 層の旧漢語 p 韻尾の欄は空白ですが、あるいは臘月の臘の lab が相当するのかもしれませんが。しかし A 層と区別がつかないので空欄とするしかありません。

中村：C 層は一例のみであり、これを層と言うことが適当であるかどうか問題ですが、仮に

層として議論するならば、B層よりも古いか、それとも異質の漢字音の層でしょう。

吉池：異質の漢字音の層とはどういうことでしょうか。

中村：契丹国を支える民族は、モンゴル系、ウイグル系、チベット系など様々でしょうが、そのうちの何れかの民族の漢字音が顔を出したという可能性もあるということです。

吉池：多民族国家の言語の在り方は一筋縄ではいかないから、様々なケースを念頭に置く必要がありますね。ところでこの後、『中原音韻』（1324年）では旧漢語 k 韻尾、旧漢語 t 韻尾、旧漢語 p 韻尾、ともに無韻尾（-ʔの有無は問わない）となるわけですが、契丹文字による漢語借用語の三つの層（A層・B層・C層）を漢語音韻史の中にどのように位置づけることができるでしょう。

中村：隋唐の中古音から遼金以降の近世音までを一つの言語の音韻変化と捉えた場合、入声韻尾の例を見ただけでもかなり激的な変化と言えます。一方、上で見たように、北宋の洛陽音（『皇極經世聲音唱和圖』）と契丹小字からうかがえる遼代の漢児言語の体系（A層）とは、入声韻尾に関しては一致しています。つまり、視点を変えれば、隋唐の中古音と北宋の洛陽音の間の変化もまた非常に大きいものであるということです。一般に、言語が激的な変化を蒙る要因の最大のもの、他言語との接触でしょう。したがって、上のA層を漢児言語の層と仮定した場合、まさに漢語とは異なる言語の話し手たちが獲得した漢語ということですから、激的な変化の理由は納得できます。

吉池：しかし、北宋の洛陽音は漢人自身の言語でしょうから、他言語との接触という要因を持ち出すのは無理ではないですか。それとも、ここにも他言語との接触が想定できますか。

中村：そうですね。特に洛陽は、『切韻』の編纂にも関わった顔之推によって金陵（＝南京）とともに当時最も標準的な言語を話す地域とされた所ですから、『切韻』の体系に近い言語を話していたはずですが、それが、わずか4百年後の『皇極經世聲音唱和圖』ではとても同一地域の言語とは思えないほど体系が変容しています。これには、唐代の安史の乱（755-763）以降の北方の状況が反映していると考えざるを得ません。

吉池：ソグドと突厥の混血である安祿山と史思明が中心になって、突厥や契丹などを含む多民族軍で洛陽を陥落させたのが755年でしたね²⁴。

中村：それ以降、洛陽および北方には非漢族の言語の影響が顕著になったと考えるのが自然

²⁴ 杉山正明(2005)『疾駆する草原の征服者』（中国の歴史 08）東京：講談社参照。

です。文法的にも、比較文が「死重於泰山」から「死比泰山重」式に変わり、「把」を用いて目的語を前置する構文が生まれるのもこの頃ですから²⁵、トルコ語や契丹語などアルタイ語の影響を受けたものと推測できます。音韻面で影響がないとは考えられません。

吉池：そうすると、中村さんの考えでは、唐代後半以降に北方では広範囲に言語接触が起こり、その結果-t韻尾や-k韻尾が消失した。それが遼の契丹小字資料にも、北宋の『皇極經世聲音唱和圖』にも反映しているというわけですね。

中村：そう思います。その際に、契丹の知識人は語彙によっては古い発音をも取り込んでいて、それがB層やC層ということになりますが、それが契丹漢字音と呼ぶべきものなのか、それ以外のものなのかは入声韻尾の検討だけではまだ何も言えません。

吉池：これまで入声韻尾の有無について全8回にわたって検討しました。入声韻尾についてはここまでとしましょう。

²⁵ 太田辰夫(1981)『中国語歴史文法』京都：朋友書店。再版本 1985年による。